

あ
や
め
の
ハ
エ
ピ
ン

阿
部

泉
咲

彩夢^{あやめ}は高校三年生。でも、高校生でいられるのもあと少しだ。今日は明日の卒業式の予行練習。久しぶりに足を運んだ体育館は、もうすっかりこの前までバレエボールをしていたとは思えないくらい引き締まった空間で、コート^{コート}の線が消されてしまったと思うくらい別世界だ。紅白幕に身を包んだステージをふと見ると、彩夢の目に、校章旗がとまった。どうみてもハエだよ。彩夢は三年間お世話になった校章に思いをはせた。

校章は、アヤメをモチーフにしたものらしい。だけど、この校章は「ギンバエ」とか「ハエピン」とか、呼ばれていた。バッチとして制服にくっついていて、銀色の小さな校章は、アヤメの花びらと「高」の文字の組み合わせのデザインのおかげで、ハエが羽を広げたとまっているように見えるからだ。

ハエピンには、十年に一度、不思議なものが紛れているという言い伝えもあった。それに当たった人は、高校生活を幸せに送れると

いわれていた。彩夢のギンバエは、そんな特別なものではなかったけど、登校のときも、勉強をしているときも、昼食を食べるときもいつだって一緒だったギンバエは、彩夢にとってすごく特別なものだった。彩夢の高校生活を間近で見てきたのは、間違いなくこの胸にとまっている、一匹のハエなのである。

彩夢は大きな姿見に、制服姿の自分を映した。すっかりからだに馴染んだ制服、それからハエピン。

ハエ。彩夢はギンバエとの思い出を一つ思い出した。それは確か、一年生の衣替えの時期だった。高校生活にも慣れてきて、制服も軽くなった初夏のことだったかな。

*
衣替えまで着ていた冬の制服は、毎日ハエピンは付けっぱなしでいいのだが、夏服のワイシャツになると、毎日取ったり外したり。部活の朝練があるのに寝坊をして家をとび出した彩夢は、ギンバエをすっかり忘れていた。

「ないないないっ。」

朝練後、ギンバエを付けてこなかったことに気づいて、もう慌てっぱなしだった。

「どうしたんだよ、彩夢。」

「今日くらい、どうってことないよ。」

そうチームメイトに励まされたが、やっぱり落ち着かなかった。不安でいっぱい、気が付いたら保健室のベッドの上だった。

「あなたが倒れてから、顧問の先生が心配して、お家に電話したの。そうしたらこれ、お母さんが届けてくれたよ。洗濯機の中に交じっていたって。」

保健室の先生はそう言ってハエピンを渡してくれた。ギンバエをワイシャツのポケットにつけると、今その瞬間に至るまでの一部始終が、とてつもなく恥ずかしいことに思えた。

「あ、あの、もう元気になったのでっ。」

保健室を飛び出した。たった一日ギンバエをつけて来るのを忘れただけで、こんな風になるなんて本当に信じられなかったから。

*

教室に戻ると、みんな集まって写真を撮り合っていた。ぼうつと教室を眺めている彩夢のもとに、親友の桜良さくらが駆け寄ってきた。そうして、彩夢に向かってこう言った。

「ずっと、ずっと、言おうと思っていたんだけど…、今日は瑠璃色なんだね。本当にきれい。」

「瑠璃色って、何が…。」
彩夢は親友の言っていることの意味がさっぱり分からなかった。

「何って、それだよ。」
彼女が指さした先にいたのは、彩夢の胸元にとまっているギンバエだった。

「もしかして、気づいてなかったの？ クラスのみんな、いや、全校のみんなが気づいていたよ？ 彩夢のハエピンは、いつも色が違ってた。体育祭で優勝した時は金色に、数学のテストが帰って来た時は赤色だった。体操着無くして見つかった後は、ピンク色。」

トイレに駆け込んでいる日は、くすんでた。
私はそれを毎日毎日隣で見えてきたよ。」

彩夢は胸元のハエピンを見た。瑠璃色？

彩夢には、ギン色にしか見えなかった。

「あー、すっきりした。ねえ、早くうちらも
写真撮ろう。」

困惑している彩夢をよそに、そう言って桜
良はいきなりシャツターを切った。

「彩夢。」

どこからか声が聞こえる。今度は桜良では
ない。その声が胸元のギンバエからだとい
うことに気づくのに、時間はかからなかった。
「これからは自分で、今日はどんな色の日だ
ったか、考えるんだよ。そうすれば、人生は
とても色鮮やかだって気づくはず。今日まで
ありがとう。楽しかったよ。」

ギンバエはそう言うといっそう輝きを増
した。ギンバエからのメッセージを心に刻む
と、今度は彩夢にも、その色と輝きを感じら
れたのだった。
(おわり)